「共同行為における自己実現の段階モデル」を用いた協創型地域づくり拠点の参加者の意識と行動変化の分析

An Analysis of Participant’s Behaviors in Collaborative Community Platform Based on Stepped Collaborative Self-Actualization Model

坂倉杏介・保井俊之・白坂成功・前野隆司
（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科）

Kyosuke SAKAKURA, Toshiyuki YASUI, Seiko SHIRASAKA, Takashi MAENO
(Graduate School of System Design Management,Keio University)

要旨

「共同行為における自己実現の段階モデル」は、「地域の居場所」における来場者のつながり形成や自発的な活動の創出メカニズムを解明するため、その代表事例の一つである「芝の家」を対象事例に、筆者らが開発した分析モデルである。本研究ではさらにこのモデルを拡張し、地縁コミュニティを重視した居場所型拠点だけではなく、様々なテーマ・形態を持つ「協創型地域づくり拠点」全般に応用可能なモデルを仮設的に構築し、比較事例調査を通じて検証する。事例は、地縁コミュニティ型／テーマコミュニティ型、居場所型／活動拠点型の４類型に整理し、全国の協創型地域づくり拠点の成功事例として「うちの実家」、「リタクラブ」、「津屋崎ブランチ」を取り上げた。参加者に対する聞き取り調査を実施した結果、拡張版モデルを用いることで参加者の意識と行動変化の過程がよく説明されることがわかり、その有効性が明らかになった。

キーワード　共同行為における自己実現の段階モデル、コミュニティ形成、協創型地域づくり拠点、自己実現、共同性

研究の背景と目的

少子高齢社会の到来を背景に、市民の支え合いや地域課題の主体的な解決の基盤となる地域コミュニティの形成が希求されている。こうしたなか、「地域の居場所」、「コミュニティカフェ」、「まちの縁側」等と呼ばれる、様々な人が気軽に出入りし自由に交流できる小規模の拠点が増加している［14］。背景には、産業集積やイベント中心の地域活性化施策から自治体や NPO の協働を重視する政策への変化［21］、多様なステークホルダーの関係性のなかで課題解決を図るプラットフォーム型の地域ネットワークづくりへの期待［11］［18］があり、今後の地域活性化の中心的な施策の一つになると考えられる。しかし、こうした地域拠点からつながりや活動が生じる過程や、拠点を設計・運営するための方法論、そして活動が地域住民の自発的ネットワークや社会関係資本の回復、さらに地域活性化にどうつながるかについては、まだ十分に解明されていない。

このため筆者らは、代表的な地域の居場所の事例である「芝の家」を取り上げ、そこに集う来場者がつながりを形成し、自発的な活動を創出していくメカニズムを、居場所における他者との関係と自己の意識の変化を通じた段階的な行動の変化として捉える「共同行為における自己実現の段階モデル」によって解明し、市民の自発性を活かした地域活性化に向けた一つのモデルを提案した［16］。このモデルは、地域コミュニティ形成のための居場所づくりのほか、個人の自己実現を尊重した地域活性施策の分析への応用［7］。居場所の運営手法をデザインするワークショップにも用いられ［17］大きな成果を上げている。

しかし一方で、本モデルは地縁コミュニティ形成を重視する居場所型拠点を訪れる来場者の行動変化に特化したモデルであることから、地域福祉やまちづくりなどよりテーマ性を重視した拠点や、コワーキングスペースやミーティングスペースのような活動拠点としての性格の強い形態の場への適応がしにくいという限界があった。地域の居場所のみならず、多世代の共存・交流・共創を生み出し、多様な主体間のつながりを生み出すオープンな場の創出はますます求められており、こうした場での活動創出メカニズムの解明は重要な研究テーマである。

そこで本研究では、「共同行為における自己実現の段階モデル」の対象をさらに拡張し、様々なテーマ・形態の「協創型地域づくり拠点」の分析に有効な一般的な分析モデルを構築する。

研究の方法

1. 研究の概要

本研究では、「共同行為における自己実現の段階モデル」を修正した「拡張版モデル」を作成し、全国の代表的な協創型地域づくり拠点を事例に検証する。事例は、協創型地域づくり拠点を 4 類型に整理し、前研究で分析した「芝の家」が含まれる地縁コミュニティ重視／居場所型タイプ以外の 3 類型それぞれについて全国の代表的な事例を取り上げる。そして、各事例 について 10 名程度の参加者に対する聞き取り調査を通じて、「拡張版モデル」がこれらの拠点における参加者の行動変化にあてはまるかどうかを検証する。またあわせて、各拠点の参与観察と主宰者に対する聞き取り調査を行う。

2. 共同行為における自己実現の段階モデルの概要

まず「共同行為における自己実現の段階モデル」（ここでは、「従来版モデル」と表記する）についてだが、これは、地域の居場所を訪れる来場者の行動を、「利用者としてくつろぐ」状態から、次第に「居場所として訪れる」、「スタッフロールをとる」、「地域活動をはじめる」といった形で段階的に発展する過程として捉え、それを促進する要因を、他の来場者との信頼関係の構築による共同性の深まりと、他者との関係を通じた自己実現意欲の高まりの 2 つの要素から説明しようとする枠組みである。行動を促進させる共同性と自己実現の段階として、共同性については主に田中重好による共同性の段階的発展モデル［20］を参照し、自己実現については、Maslow の欲求段階説［8］を援用して設定した（図 1）。

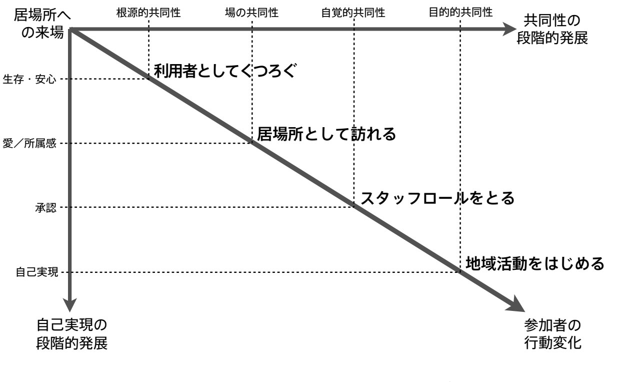

図 1. 共同行為における自己実現の段階モデル（従来版）

表 1 は、来場者の共同性と自己実現の段階の定義である。居場所に初めて訪れた段階から、定期的に訪問するようになり、そのなかで他者とのネットワークが拡大し、次第に運営への参加や援助的な活動を行うようになり、やがて自分らしい活動をはじめるいという他者との関係性や意識・行動の変化をそれぞれの段階ごとに定義づけている。

表 1. 共同性と自己実現の段階の定義（従来版）

	共同性の段階	自己実現の段階
利用者としてくつろぐ	**1）根源的共同性** 初めて訪れた来場者や、二度目以降の来場ではあるものの、まだスタッフなどに一方的にケアされる「お客さん」の状態。居心地のよさを感じていても自発性は低く、様子見の状態。しかし、何らかの価値や期待を感じており、その場にいることは苦痛ではない。	**1）安心、安全** この場にいてもよいと感じられる。休憩や雑談など自由に過ごしてもとがめられないという安心感を感じる。他の組織やコミュニティにはない居心地を感じる。
居場所として訪れる	**2）場の共同性** 生活サイクルのなかに位置づけられ、定期的に訪れる。芝の家を通じた知人が増え、ネットワークができはじめる。悩みごとを相談する相手や、芝の家の外部で付き合う知人ができる。運営の手伝い、イベント準備など受動的な協力をはじめる。	**2）愛／所属感** 場への好意的感情が高まる。来場が楽しみになり、自分の居場所として愛着を感じられるようになる。芝の家で知り合った人への信頼感、好意的な感情がおこり、受け容れられている実感を得る。悩みを相談できる仲間ができ、孤独感は低下する。雰囲気、新たな人との出会い、情報の取得、研究的関心など来場動機が多様化する。
スタッフロールをとる	**3）自覚的共同性** 芝の家のネットワークの一部、あるいは協力者であるという意識が強まり、運営の手伝いや他の来場者の世話など、自立的に判断し、役割を担う行動（スタッフロール）を起こす。芝の家の理解が進み、それに応じて地域への意識の高まりが見られるようになる。運営に対する意見を述べる。	**3）承認** 役に立ちたいと願い、役割を担う歓びを感じる。自分の個性を自覚し、自己肯定感・自己効力感を得る。自己信頼感が高まり、他者と関わることへの心理的障壁が低くなる。信頼関係の構築や互恵的行動による満足を得られるようになる。芝の家以外での行動や人間関係の変化が起き始める。他者との対決や葛藤を通して自己への気づきを得る場合がある。
地域活動をはじめる	**4）目的的共同性** ある目的を共有するグループが形成され、これまでになかった活動を主体的にはじめる。イベントの企画制作、他の来場者のサポートや運営などを主体的に担うようになる。対外的な交渉や講演を担うようになる。	**4）自己実現** 初めての試みに挑戦し、自分の個性や関心を十分に発揮できる行動が見つかる。自分が求めていたこと、やりたかったことはこれだ、という意識が生じる。自分の行動が他者の幸福につながる実感を得る。ビジョンを共有する仲間を得た歓びを感じる。行動に躊躇が少なくなり、自由な自己表現ができる。芝の家での活動が自分のアイデンティティの一部になる。

「芝の家」を事例に検証した前研究では、初来場から居場所へ、居場所を通じた自分らしさの探求、自分らしい活動の発見という 3 つの段階の進展が起こることが、最終的に来場者が主体的活動に取り組むための鍵であるということが明らかになった。さらにこうした段階の進展を促す要因として、他者との関係、時間的猶予、段階に応じたスタッフのサポートが重要であることがわかった。

3. 拡張版モデルの構築

（1）従来版モデルの限界

従来版モデルが対象としていたのは、子どもから高齢者まで、目的の有無を問わずに集まる地域の居場所であった。こうした場は、比較的狭い範囲の地縁的コミュニティの活性化や地域づくりを志向しており、来場者の意識や行動の中心も、居場所への帰属意識や居場所を拠点とした活動が主である。地域住民によるまちの縁側や NPO や自治会によって運営されるコミュニティカフェなどが該当する。

しかし、より広い視点で見ると、地域の居場所には、特定のテーマ性を持ちある程度広い地域を対象にする場や、参加者のつながりを重視しながらも喫茶やサロンのような機能よりも活動拠点としての性格を強く持っているような場が存在する。こうした場では、参加者の帰属意識はその居場所そのものではなく、そこに集うコミュニティやテーマになり、また参加者が目指すのはその居場所を拠点にした活動だけにとどまらないと考えられる。

それゆえ、従来版モデルの「利用者としてくつろぐ」、「居場所として訪れる」、「スタッフロールをとる」、「地域活動をはじめる」という段階は、こうした協創型地域づくり拠点全般に適用するにはやや視野が狭く、より一般的に活用するためにはモデルを拡張する必要がある。

（2）協創型地域づくり拠点の類型

モデルを一般化するにあたっては、対象のひろがりをどのように考えるかが問題となる。ここでは、コミュニティの志向軸（比較的狭い地縁コミュニティ形成を主眼にしているか、特定のテーマを持ちある程度広い地域を対象とするか）と、拠点の機能軸（サロンや喫茶のような交流を主眼とする居場所型か、コワーキングスペースやミーティングスペースのような役割を果たす活動拠点型か）にわけて、表2のように整理した。

表2. 協創型地域づくり拠点の類型

	地縁コミュニティ重視	テーマコミュニティ重視
居場所型	比較的狭い地域のコミュニティ形成を主眼とする場。 例：「芝の家」、「岡さんの家 TOMO」（世田谷区）、「居場所ハウス」（大船渡市）など	子育てサロンや認知症カフェなど特定のテーマを持つ場で、対象地域は比較的広い。 例：「ふれあいの家おばちゃんち」（品川区）、「まちの学び舎ハルハウス」（京都市）など
活動拠点型	まちづくり活動の拠点としての性格を持つ場。 例：「ひがしまち街角広場」（豊中市）、「港南台タウンカフェ」（横浜市）など	社会起業やコミュニティビジネスを通じた地域活性化を目指す場。 「HanaLab」（上田市）、「Impact Hub Kyoto」（京都市）など

従来版は、「芝の家」に代表されるような「地縁コミュニティ重視／居場所型」（すなわち地域の居場所）を対象にしていた。拡張版では、地縁コミュニティだけではなくテーマコミュニティを重視した拠点、また居場所型拠点だけではなく活動拠点型の場も視野に入れる。

ここでは、こうした拠点全体を、「協創型地域づくり拠点」と総称する。協創型地域づくり拠点の特徴は、特定のサービスを提供するのではなく、地域の多様な主体間の関係形成に主眼を置く取り組みであるという点である。

（3）拡張版モデルの構築

従来版モデルは、居場所という空間形態によく適応したモデルであったため、「利用者としてくつろぐ」、「居場所として訪れる」、「スタッフロールをとる」、「地域活動をはじめる」という段階であった。より一般的な協創型地域づくり拠点では、場所に対する帰属意識ではなく、その拠点にできたコミュニティへの帰属やコミュニティのなかでの他者との相互関係が重要であると考えられる。このため、「利用者としてくつろぐ」は、お茶やおしゃべりが目的であることの多い居場所の来場者の気持ちや振る舞いではなく、特定の活動目的を持つ参加者が新しくコミュニティに参加し、相互作用をはじめる初期段階として、「受け入れられたと感じる」と修正する。同様に「居場所として訪れる」は、何度も参加するようになってその活動やコミュニティへの帰属意識を感じられる段階として「所属・仲間意識が生まれる」とし、「スタッフロールをとる」は、必ずしも居場所の運営やイベントの手伝いだけではなく、参加者それぞれの実現したい活動の予備的アクションや他者への援助行動として「周辺的役割行動をとる」とする。そして、「地域活動をはじめる」は、地縁的コミュニティの活動にとどまらない行動を能動的に行うという段階として「主体的活動を始める」と改める。図2が、拡張版モデルである。表3に、各段階の詳細の定義を示す。

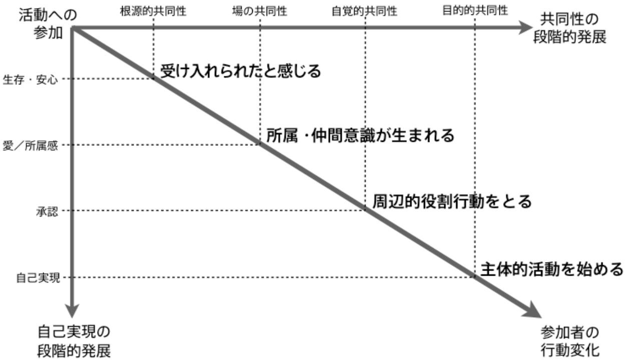

図2. 共同行為における自己実現の段階モデル（拡張版）

表3. 共同性と自己実現の段階の定義（拡張版）

	共同性の段階	自己実現の段階
受け入れられたと感じる	**1）根源的共同性** 知人の誘いやテーマへの関心、その他の偶然から参加する。その場に独特の雰囲気やあたたかさ、他では見られない参加者の多様性を感じる。他者とともにいるが、まだ自発性は低く、様子見の状態。	**1）安心、安全** はじめてでも受け入れらたと感じ、居心地の良さを感じる。場違い感を感じる場合もあるが、自分が尊重され、自由に行動したり、本質的な話題や気持ちを話せたりする安心感を感じ、何らかの期待感を持つ。
仲間・所属意識が生まれる	**2）場の共同性** 継続的に関わるようになり、定期的に参加したり生活サイクルのなかに位置づけられたりする。多様な人との交流が増え、知り合いや相談相手が増えていく。運営の手伝いやイベント準備など受動的な行動をはじめる。	**2）愛／所属感** コミュニティへの好意的感情が高まり、信頼できる仲間や自分の居場所が得られた感覚が生まれる。対話や交流を通じて自分のやりたいことへの模索がはじまる。少しずつ、自分も行動してもよいという自信が芽生える。
周辺的役割行動をとる	**3）自覚的共同性** 運営の手伝いや他の来場者の世話などを自発的に行い、コミュニティの一員であるという自覚が高まる。小さなイベントを開催する、進行役を務めるなど、周辺的参加やその後の活動につながる予備的活動行う。他者と関わることへの心理的障壁が低くなる。	**3）承認** 周辺的な参加を通じて、自分の個性を自覚し、自己肯定感・自己効力感を得る。役に立つ、感謝されることを喜びに感じる。主体性が芽生え、能動的に行動するようになる。独自の行動をはじめる自信が生まれる。活動への参加や他者との関わりから自己への理解が深まる。
主体的活動をはじめる	**4）目的的共同性** 独自の事業やイベントなど、これまでになかった主体的な活動をはじめる。目的を共有する仲間や誰かが助けてくれるという安心感が一歩踏み出す勇気につながることが多い。自信を持って他者と関われるようになった、やさしく接するようになったなど、他者関係の変化への自覚があり、それにともなって身の回りに起こることも変化する。	**4）自己実現** 自分の個性や関心を十分に発揮できる活動が見つかり、自分が求めていたこと、やりたかったことはこれだ、という意識が生じ、活動がアイデンティティになる。行動に躊躇が少なくなり、自由な自己表現ができる。 自分の行動が他者の幸福につながる実感が得られ、活動継続の動機になる。働き方や暮らし方全般が新しい価値観で書き換えられる。

4. データ収集の考え方

協創型地域づくり拠点における参加者の意識や行動変化を調査するにあたっては,いくつかの障害が存在する。まず、参加主体への直接的なアクセスが困難であることから、多量のサンプルを集めにくいという点が挙げられる。さらに,運営形態や活動テーマが多岐にわたるため、共通の質問項目を立てにくく、質問紙による調査を実施しづらい。

そこで本研究では、参加者の他者関係と意識変化のデータを収集するために、参加者に対する聞き取り調査を行う。拠点に参加する前から現在にいたるまで、他の参加者との関係や自身の意識変化などの体験について聞くことで、つながりと活動が生じた過程についてのデータを収集する。さらに、事例ごとの特殊な条件からの影響をできるだけ抑えるために、複数の異なる運営形態・活動テーマを持つ事例を取り上げ、モデルを検証することにする。

5. 比較事例

事例の選定にあたっては、表 2 のうち、「芝の家」が代表する地縁コミュニティ重視／居場所型の拠点を除く 3 類型について、全国の代表的な事例を選定する。ここでは、「うちの実家」、「リタクラブ」、「津屋崎ブランチ」を取り上げる。

表 4. 比較対象とする事例

	地縁コミュニティ重視	テーマコミュニティ重視
居場所型	「芝の家」 (東京都港区)	「うちの実家」 (新潟市)
活動拠点型	「津屋崎ブランチ」 (福津市)	「リタクラブ」 (富山市)

事例選定は、拠点から数々のつながりと活動が生じている各分野における成功例といえる事例であること、最低 3 年間継続している持続性の高い事例であることを基準とした。さらに、テーマが偏ることなく、代表的な分野である地域福祉、コミュニティビジネス、まちづくりから一事例ずつを選定することとした。表 5 は、事例の概要である。

表 5. 共創型地域づくり拠点の概要

	芝の家	うちの実家	リタクラブ	津屋崎ブランチ
所在地	東京都港区	新潟市	富山市	福津市
テーマ	地域コミュニティ	地域福祉・コミュニティヘルス	コミュニティビジネス・生涯学習	まちづくり・移住支援
代表者	坂倉杏介	河田珪子	平木柳太郎	山口覚
事業主体	行政＋大学	民間(個人)	民間(株式会社)	行政→民間(NPO)
設立年	2008 年	2003 年(〜2013 年)	2009 年	2009 年
開室時間	火曜〜土曜日:12 時〜17 時	火曜日、金曜日:10 時〜15 時 (夜の茶の間:毎月第 3 金曜日 18 時〜)	月曜〜木曜日:10 時〜22 時 金曜〜日曜日:10 時〜20 時 定休日:第 2、4 日曜日	必要に応じていつでも
利用料	無料 (喫茶コーナー利用料:100 円)	会員制 入会金:2,000 円 参加費:300 円 昼食代:300 円	会員制 入会金:3,000 円 月額利用料:2,500 円〜4,000 円	なし

以下、各事例の概要を述べる。

(1)「うちの実家」

全国初の有償ボランティアによる在宅福祉サービス「まごころヘルプ」を設立した河田珪子が代表を勤める常設型地域の茶の間である。2003 年に新潟市に設立され、子どもからお年寄り、障害の有無にかかわらず、誰でもいつ来てもいつ帰っても大丈夫という地域の居場所の先駆けである。新潟県内の地域の茶の間全県普及のきっかけになるほか、全国の地域の居場所やコミュニティカフェ設立の動きに大きな影響を与えた。運営は、行政からの補助金ではなく、有志からの寄付や利用料だけで行われている。

図 3. 「うちの実家」

毎月第 3 金曜日の夜に開催される「夜の茶の間」には、市内外の医療・福祉関係者など多様な主体が集まる場と

なり、活発な活動を生み出す地域福祉のネットワークに発展した。2013 年に活動を終え、現在は月 1 回の地域の茶の間が近隣の公民館で開催されている。

類型としては、居場所型で、新潟市を中心に県内全体を対象とする地域福祉をテーマにした事例である。

(2)「リタクラブ」

富山をおもしろくしたいという想いから平木柳太郎が設立した、学びたい大人のための自習室である。会員制で、デスクやオフィス機器、ミーティングスペースなどの提供をするほか、各種の講座や利用者の交流イベントを数多く開催している。利用者が講師となってセミナーが開かれることも多く、また起業のきっかけにもなっている。「リタクラブ」の成功の影響を受けて、県内外に連携した拠点が複数開設されるなど、新しいコミュニティビジネスのネットワークが創出される拠点となっている。株式会社で運営されている。

類型としては、活動拠点型で、富山県内全域を対象に、生涯学習やコミュニティビジネスをテーマにした拠点である。

図 4. 「リタクラブ」

(3)「津屋崎ブランチ」

かつて漁村として賑わっていた津屋崎千軒地区の活性化のため、福岡県福津市が移住してまちづくりを進める担い手を全国から公募したことが発端になった活動である。公募で集まった 4 人の若者が中心となり、「津屋崎ブランチ」と名付けられた共同オフィス兼会議室を設置した。津屋崎ブランチを拠点に、移住促進や地域のイメージアップ、住民による小さな起業促進を進めた結果、数十人の移住が実現、地域内外の人による様々な起業や交流が生まれるようになっている。また、空き家再生事業も盛んに行われるようになり、「津屋崎ブランチ」がきっかけとなった人脈がまちづくりの新たな推進力となっている。

図 5. 「津屋崎ブランチ」

類型としては、活動拠点型で、福津市の特に津屋崎地区を対象にした地縁コミュニティを重視した、まちづくり、移住支援の拠点である。

6. 参加者への聞き取り調査

(1) サンプリング

各事例につき 10 名程度、聞き取り調査を行う。対象者は、拠点への参加がきっかけとなり主体的に活動するようになった参加者を、各拠点の主宰者から紹介してもらう。年齢や性別、職業など、可能な限り多様な人選をしてもらうよう依頼した。

(2) 質問方法

聞き取り調査は、半構造インタビューの形式で行う。各参加者約 1 時間で、拠点に参加してからいままでのなかで、ご自身にどんな変化があったか、現在の活動をはじめるための節目になった出来事などについて、ゆっくり思い出しながら話してもらう。

(3) 質問項目

質問は、他者関係と意識変化に注目し、他者との出会いによって変わった自分の意識や行動、自分の意識や行動によって変わった他者との関係についてフォーカスする。聞き取りにあたって事前に用意した質問項目は、以下の通りである。

- はじめてその活動（主宰者）に参加した（出会った）のは、いつどのような経緯か。その時の印象について。
- 次にどのような行動はをとったか。それはいつ、なぜか。その時の印象について。
- 参加する前の状況について。
- 拠点に関わるなかで起こしたアクションについて、どんなことを考えてそれを行ったか、またその結果起きた変化は何か。
- 印象的な出会いはあったか。その理由について。
- 他者との関係の変化があったかどうか。ネットワーク数、つきあい方などについて。
- 活動をはじめたきっかけは何か。一人だけで決断したか、また他者の影響があれば、どのような影響か？
- その他。

6. 拠点の参与観察および主宰者への聞き取り調査

参加者に対する聞き取り調査を補完するため、拠点で行われている交流や空間の使われ方についての参与観察を行い、あわせて主宰者に対する聞き取り調査を行う。主宰者に対する聞き取りでは、参加者が行動を変化させていく背景となる拠点の空間やルールの設計について資料を収集する。聞き取りにあたっては、国領（2011）によるプラットフォーム設計の 5 つの変数（コミュニケー

ション・パターンの設計、役割の設計、信頼形成メカニズムの設計、インセンティブ設計、参加者の内部変化のマネジメント）の評価軸を参考に、内的動機づけや中間支援を果たすための空間・ツール設計、運営者によるコーディネイションなど人的要因などを聞く。

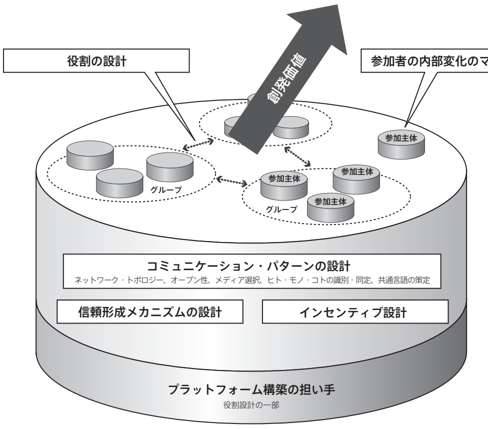

図 6. 協働プラットフォームの概念図

結果

1. 聞き取り対象者の概要

表 6〜8 は、聞き取り調査を行った参加者の一覧である。「うちの実家」は 2014 年 2 月 13 日〜15 日、「リタクラブ」は 2014 年 2 月 22 日〜25 日、「津屋崎ブランチ」は 2014 年 1 月 27 日〜30 日にかけて聞き取り調査を行った。合計人数は 28 人である。

表 6. 「うちの実家」の聞き取り調査結果

名前	性別	年代	職業
Sさん	男性	30代	社会福祉協議会職員
Sさん	女性	60代	主婦
Wさん	男性	30代	市職員
Tさん	女性	60代	主婦
Tさん	女性	60代	主婦
Nさん	女性	60代	主婦
Nさん	女性	60代	主婦
Sさん	男性	40代	自営業
Tさん	男性	60代	元市職員
Iさん	男性	30代	社会福祉協議会職員

合計 : 10 名　聞き取り場所 : 新潟市石山地区公民館、ホテルオークラ新潟ロビー　聞き取り期間 : 2014 年 2 月 13 日〜15 日

表 7. 「リタクラブ」の聞き取り調査結果

名前	性別	年代	職業
Oさん	女性	20代	カイロプラクター
Kさん	女性	不明	ビジネスコーチ
Yさん	男性	40代	会社経営
Mさん	男性	30代	会社員
Mさん	男性	40代	ビジネスコーチ
Mさん	女性	不明	人材開発トレーナー
Nさん	男性	40代	詩人
Tさん	男性	40代	会社員
Sさん	女性	40代	ビジネスコーチ
Kさん	女性	30代	キッチンライフアドバイザー

合計 : 10 名　聞き取り場所 : リタクラブ　聞き取り期間 : 2014 年 2 月 22 日〜25 日

表 8. 「津屋崎ブランチ」の聞き取り調査結果

名前	性別	年代	職業
Hさん	女性	40代	主婦、カフェ店主
Iさん	男性	20代	学生
Yさん	女性	50代	民宿経営
Kさん	男性	30代	自営業、カフェ店主
Hさん	女性	20代	公務員
Sさん	女性	70代	地域活動家
Nさん	男性	30代	会社員、建設業
Nさん	男性	60代	会社役員、建設業

合計 : 8 名　聞き取り場所 : 津屋崎ブランチ未来会議室、カフェ&ギャラリー古小径、ゲストハウス旧河野邸、繋屋珈琲店、民宿吉田屋　聞き取り期間 : 2014 年 1 月 27 日〜30 日

2. 聞き取り調査から得られた参加者の行動変化とモデルの検証

聞き取り調査の結果、どの事例においても、参加者は拠点に参加することによって他者との関係を拡大し、その相互作用を通じて自分自身の意識や実現したいことを深め、やがて活動をはじめるという過程があることがわかった。各事例の調査概要と代表的なケースを以下に提示する。

(1)「うちの実家」W さん（30 歳代男性）のケース

「うちの実家」で活動する参加者は、60 代の主婦が多く、自身が介護を経験したり、まごころヘルプの有償ボランティアを行っていたりする人が多い。一方、社会福祉協議会や市役所の 20 代〜30 代の職員も多く、夜の茶の間ネットワークなど新しい地域福祉の活動を行っている。いずれの参加者も、主宰者である河田氏の哲学に触発され、「うちの実家」での他の参加者とのあたたかいふれあいを通じて、コミュニティに対する意識やふるまいを変化させている。また、「うちの実家」で他者への援助的行為やイベントの手伝いといった役割を担うなかで、様々な活動に主体的に取り組むようになっている。

市役所職員の W さんは、広報誌の取材のために「うちの実家」に訪れ、今では夜の茶の間ネットワーク中心人物の一人である。もともと市役所に勤めたのは、三国志に憧れ仁政がしたいと思ったからだった。「新潟市に住んでよかったと思える人々を増やそう」と勉強会をはじめるが、そのうち、仕事だけでいいのかと思うようになったという。「うちの実家」の初めての印象は、「落ち着くっていうか、まさに実家という感じ」だった。その後、「うちの実家」で同世代の仲間ができ、運営の手伝いをするなかで、地域福祉の計画づくりにも関わるようにな

り、市役所職員という自身の職務に、これまでにも増して高いやりがいをもって取り組んでいる。

モデルに示すと図 7 のようになる。

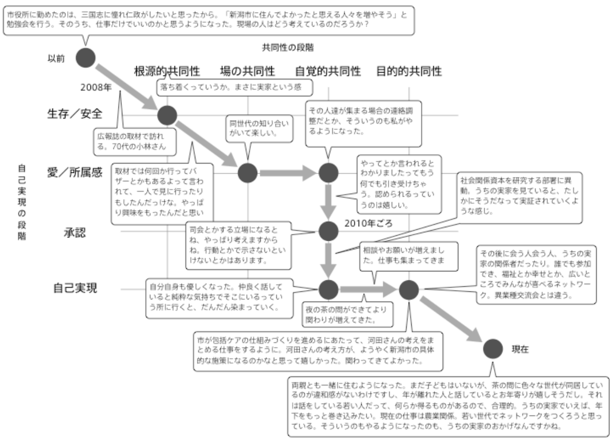

図 7. 「うちの実家」W さんのケース

当初は業務として訪れたが、初めての来場時に落ち着ける雰囲気を感じ（受け入れられたと感じる）、興味を持つ。何度も足を運ぶようになることで同世代の仲間ができ（所属・仲間意識が生まれる）、役割を得ることで（周辺的役割行動をとる）、自覚が生まれ、意識が変わっていく。また、異動によって「うちの実家」の社会的意義の理解が深まり、同時に「優しくなった」と性格の変化も感じるようになる。以降、他者との関わり方が変わるにつれてネットワークも豊かになり、市政の一部に関われたというやりがいを感じられ（主体的活動をはじめる）、また家族との関係も変化してきた。モデルに落とし込むことで、他者との関係変化と自己の意識変化が相互に影響を与えあいながら行動の変化につながっている様子が明確になった。

(2)「リタクラブ」S さん（40 歳代女性）のケース

大人のための自習室を謳う「リタクラブ」は、キャリアアップや起業を望む人たちが多く集まっている。単なるシェアオフィスというより、ともに学び合う会員同士の交流を重視した運営を行っている点が特徴である。

40 歳を前に、シングルマザーでもある S さんは、職歴に自信の持てない自分だが、より自分らしい仕事をしたいと悩んでいた。そんな折、コーチングに出会い、それを生涯の仕事にしたいと思うようになる。コーチングの先生が 2 階にオフィスを借りていた縁で、「リタクラブ」で開催された講座に参加するようになり、そこで起業を後押しされる。セミナーを開くには会員になったほうが割安だということで会員になり、それ以降、折に触れて「リタクラブ」のスタッフと参加者の支援を受けながら、3 ヶ月後に独立した。これまで、経営者はものすごい人だと思っていたが、いまは気後れしなくなった。自分は自分として生きればよいと思えるようになった。

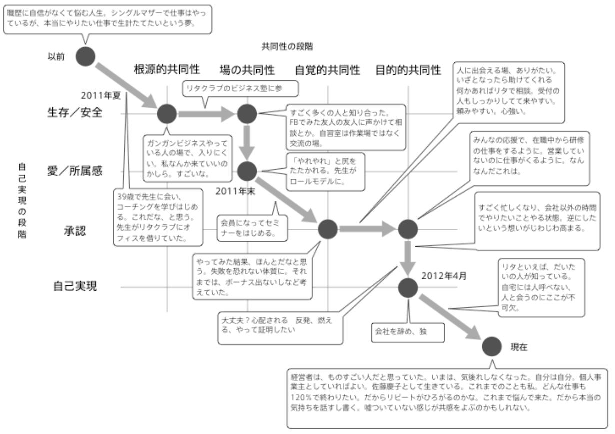

図 8. 「リタクラブ」S さんのケース

S さんの過程を図示したのが図 8 である。当初は「私なんて来ていいのかしら、すごいなと違和感を感じていたが、ビジネス塾に参加することになり（受け入れられたと感じる）「リタクラブ」を通じ多くの人に出会い、起業を促されるようになる（所属・仲間意識が生まれる）。やがて、会員になり自分が講師になってセミナーをはじめる（周辺的役割行動をとる）と、在職中にもかかわらず個人の仕事が増えてきた。失敗を恐れない体質になってきたと変化も感じるようになった。次第に、やりたい仕事にもっと時間を取りたいと意識が変わる。3 ヶ月後、会社を辞め、独立した（主体的活動をはじめる）。「リタクラブ」は、何かあれば助けてくれる安心感があり、起業してみると、「リタクラブ」でセミナーを開催しているといえば知っている人が多く、信頼を得られやすい。「リタクラブ」で得たネットワークのなかで意識が次第に変化し、起業が後押しされてきた様子がわかる。

(3)「津屋崎ブランチ」H さん（40 歳代女性）のケース

「津屋崎ブランチ」には、移住してきた新住民、地元のまちづくりに関わってきたシニア層やその子供世代など様々な人が関わっている。過疎の漁村の活性化に向けて、移住支援のための空き家の再利用と小さな起業支援を進めている。地元の人は、若者や移住者と交流する中で、地域の豊かな自然や古民家を資源として再認識し、外から来た人は地域住民に見守られながらコミュニティの良さを実感して暮らしている。こうした交流のなかから、移住者の増加と新しいまちづくりに向けての活気が生まれている。

子育てを機に、夫の実家である津屋崎に家を建てたという H さんは、地元の「おばちゃん」たちにお世話になるうちに、のんびりした津屋崎の雰囲気が好きになった。「津屋崎ブランチ」を主宰する山口さんによる「プチ起

業塾」に参加したのがきっかけとなり、空き家を改装したカフェを始めることになった。津屋崎はいいところなのにひろがらないという問題を感じていたから、そのためにできることをやっている。自分が楽しくて、たまに人によろこんでもらえて、できるだけがんばる。それをゆるしてくれるまち。津屋崎でなければやっていなかったと感じている。

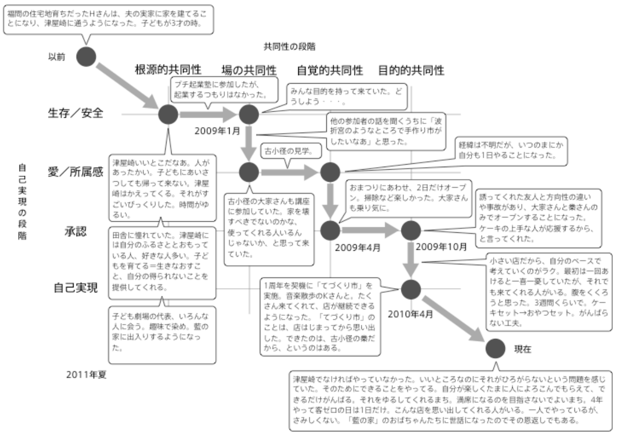

図 9.「津屋崎ブランチ」 H さんのケース

モデルに示された H さんの過程からは、予期しない出会いが意識や行動の変化につながっていることがわかる。もともと津屋崎に対する愛着を持ち、地元のおばちゃんたちにお世話になっていた（受け入れられたと感じる）。そんな折、特に起業するつもりはなく参加した「プチ起業塾」だったが、他の参加者と話すうちに自分でもやりたいことがあることが見えてきた。古民家の大家さんと出会った（所属・仲間意識が生まれる）ことがきっかけになって、イベントを行うことになった（周辺的役割行動をとる）が、やってみると楽しく、いろいろな経緯があった後、自分が中心になってそこで店をやることになった（主体的活動をはじめる）。そして、自分が店をやることは、好きな津屋崎に対する恩返しでもあるということに振り返って気づくようになり、「手作り市」も実現 d きるようになった。このように、モデルを通してわかるのは、H さんのケースは、偶然の出会いによって、自分の実現したいことが次第に明らかになってきた過程だということである。

3. 主宰者への聞き取り調査結果

こうした参加者の他者との交流や行動変化を支えるために、拠点の主宰者はどのような工夫をしているのだろうか。主宰者への聞き取り調査からは、参加者同士の関係づくりや変化の見守りなど、きめ細かい配慮をしていることがわかった。協働プラットフォームの設計変数に沿ってまとめると、表 9 の通りである。

表 9. 主宰者に対する聞き取り調査の結果

協働プラットフォームの設計変数	うちの実家	リタクラブ	津屋崎ブランチ
コミュニケーションパターンの設計	○利用者ルール ○プログラムを用意しない ●取材予定など張り紙 ●開けっ放しの玄関 ●自分でする受付 ●柔軟な家具の配置	○参加者への面接 ○コンセプトは自習室 ●パーティション ●駐車場の確保 ●本棚	○未来会議室のルール ●土間 ●ワークスペース ●ポストイットや模造紙
役割の設計	○主宰者が声かけて誘う ○お当番の署名 ○一番弱い人のケア ○主宰者の不完全さ	○研修主催の推奨 ○スタッフも起業を目指す	○起業支援 ○スタッフの役割の明確化 ○「大丈夫！」と励ます
信頼形成メカニズム	○参加者同士を紹介 ○仲良しクラブをつくらない ○ありがとうの気持ちを皆に伝える ○主宰者のゲートキーピング	○参加者同士を紹介 ○スイーツ交流会 ○主宰者のゲートキーピング ○出入り禁止の通達 ●メンバー紹介カード	○参加者同士を紹介 ○ブランチが信用担保 ○住民同士の橋渡し ○自ら引っ越すこと
インセンティブの設計	○人のネットワーク ○誇りが持てる場 ○みんなが学べる場	○人のネットワーク ○ロールモデルとしての主宰者 ○何かしたくなる空間	○人のネットワーク ○課題解決ではなく、おもしろいことをする ○ユーモアのある企画による選択的集客
参加者の内部変化のマネジメント	○主宰者の見守り	○主宰者の見守り ○参加者の声を取り入れる	○主宰者の見守り ○修復的介入

表中の●は、空間的な設計であり、○は、ルールやスタッフの配慮などソフト面の設計要因を示している。コミュニケーションパターンについては空間が規定する要素が大きく、また明確なルールを設けることによって参加者の行動パターンをコントロールしていることがわかる。参加者同士がどのように役割を担うかだが、主宰者やスタッフが声をかけたり、主体的な活動をしていこうという規範をつくることが重要であるようだ。参加者同

士の信頼関係の形成は、主宰者やスタッフが間に立って紹介することをどの事例でも行っている。また逆にゲートキーパーの役割を果たすことによって、安心して相互に関われる環境をつくってもいる。参加者が繰り返し拠点を訪れるのは、そこに集うネットワークが最も大きいインセンティブになるようである。そして、参加者の内部変化は、主宰者が見守り続けるということで行なわれている。一見何も指示していないように見えて、何かあったときはケアできるよう目を配るのが主宰者の大きな役目であるといえる。このように、様々なフェーズにおいて参加者の「受け入れられたと感じる」、「所属・仲間意識が生まれる」、「周辺的役割行動をとる」、「主体的活動を始める」という段階を促進する工夫がなされていることがわかった。

考察

1. モデルの適応

調査の結果から、「芝の家」以外の協創型地域づくり拠点の参加者の変化過程についても、拡張版モデルを用いて良く説明できることがわかった。いずれの事例でも、他者との相互作用が自分らしい活動につながっていた。受け入れられた実感が得られることで、継続的に参加するようになり、仲間が得られる。他者と関わるなかで次第に自分のやりたいことが明確になり、何かしらの周辺的活動に参加する。他の参加者の活動の手伝いや試験的なイベント、セミナーの主催などが、起業や主体的な活動に一歩踏み出すことにつながる。いずれの事例でも、他者との関係があることが、何かあったときに助けてもらえる信頼感や無理せず自分らしく取り組むことができる雰囲気につながっており、こうした安心感が活動開始を促進しているといえる。

2. 類型による特徴

類型ごとに特徴が見られることも明らかになった。まず、活動拠点型は、参加者が活動をはじめるまでの期間が短い傾向がある。「芝の家」や「うちの実家」は、初参加から主体的行動までの期間が半年から数年であるが、「リタクラブ」や「津屋崎ブランチ」では、3 ヶ月程度で起業する参加者もいる。

初参加が継続的な参加につながるためには、居場所型では、居心地のよさや自由にいられる雰囲気が、活動拠点型では、本音で話を聞いてもらえた経験や、そのコミュニティに何かの期待感を持つことが継続参加の誘因になることが多い。

対象地域の狭い地縁コミュニティ拠点に比べてテーマ型コミュニティ志向の拠点は、参加者の多様な職種間を横断するブリッジング型のネットワークが生まれやすいようだ。一方、地縁型拠点では、生活上の援助的関係が基盤となり、活動が具体的になるにつれて組織間のネットワークが生まれる。

すべての類型で、周辺的役割活動の機会があることが主体的活動へのきっかけになっているが、居場所型では拠点の運営の手伝いやイベント準備が参加者の意識を明確にしたり自信につながったりしており、活動拠点型では、セミナーの主催や気軽に活動を試してみる機会が、参加者の動機付けにつながっていると考えられる。

3. 行動の発展段階

図 10 は、3 事例の参加者の多くに共通するパターンをまとめた図である。初参加時に受け入れられた実感を得ることで、所属意識や継続参加につながる。ついで、周辺的役割行動や他者との関係が、自分らしい活動の探求につながる。そして、自分らしい活動を見つけ、他者の助けを借りながら主体的な活動をはじめるという発展段階が見られる。

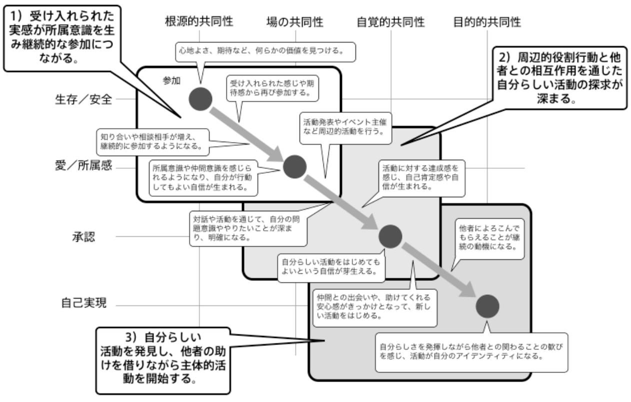

図 10. 活動にいたるまでの段階的過程

初参加が継続的参加へ、行動と相互作用が自己の探求へ、自分らしい活動の発見が主体的行動の開始へとそれぞれつながるかどうかが重要なポイントになると考えられるが、主宰者への聞き取り調査と照らし合わせると、すべての事例で、こうした相互作用が促進されやすいよう、空間、ルール、スタッフの介入などを設計していることがわかった。そして、参加者の関係や意識の変化を見守りながら、適切なタイミングで役割を与えたり、試験的な活動に誘ったり、また参加者同士の紹介やトラブルがあったときの修復的介入など、具体的な形には見えにくいが主宰者の働きも重要であることが明らかである。

まとめ

本研究では、拡張版の「共同行為における自己実現の

段階モデル」を構築し、全国の協創型地域づくり拠点を4 類型に整理して事例調査を行い検証した。その結果、地縁コミュニティ重視／居場所型、テーマ型コミュニティ重視／居場所型、地縁コミュニティ重視／活動拠点型、テーマ型コミュニティ重視／活動拠点型の 4 類型すべてに、拡張モデルが当てはまることが明らかになった。

多様なステークホルダーの協創が、今後の地域活性化にますます求められていくはずだ。こうしたなか、つながりの形成と自発的な活動が生まれる協創型地域づくり拠点は、市民一人ひとりの内的動機づけを引き出し、新たな社会関係資本を蓄積していく有効な手段になり得るだろう。本研究で提案する分析モデルが、さらなる拠点の質・量両面での充実に寄与することが期待される。

今後は、人材育成事業や地域活性化団体の取り組み、産業創出プラットフォームなど、拠点型だけにとどまらない多様な協創型地域活性化施策の分析への応用を予定している。

引用・参考文献

[1]Goldberg, L. R., 1992, The development of markers for the Big-five factor structure, Psychological Assessment 4 (1), 26-42.

[2]久繁哲之助, 2008, 日本版スローシティ：地域固有の文化・風土を活かすまちづくり, 学陽書房.

[3]慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所, 2012, 芝地区の新たなコミュニティ創造事業に関する調査研究研究報告書：昭和の地域力再発見事業の評価.

[4]北野収, 2008, 共生時代の地域づくり論：人間・学び・関係性からのアプローチ, 農林統計出版.

[5]黒澤武邦, 2012, 都市再生とまちづくり, 片木淳・藤井浩司編著, 自治体経営学入門, 一藝社.

[6]国領二郎, 2011, 創発経営のプラットフォーム―協働の情報基盤づくり, 日本経済新聞出版社.

[7]前野マドカら, 2014, 主観的幸福の 4 因子モデルに基づく人と地域の活性化分析, 地域活性研究, Vol.5, 41-50

[8]Maslow, A, H., Motivation and Personality, Harpercollins College Div, 1954.

[9]McGregor, D., 1960, The Human Side of Enterprise, McGrawHill.

[10]諸富徹, 2010, 地域再生の新戦略, 中央公論新社.

[11]名和田是彦, 2008, コミュニティとコミュニティ・プラットフォーム, 地方自治, 732, 2-15.

[12]Nonaka, I. and Konno, N., 1998, The Concept of "Ba": Building a Foundation for Knowledge Creation, California Management Review Vol.40, No.3, Spring1998.

[13]岡田浩一ら, 2006, 地域再生と戦略的協働, ぎょうせい.

[14]大分大学福祉科学研究センター, 2011, コミュニティカフェの実態に関する調査結果.

[15]坂倉杏介, 2010, 地域の居場所からのコミュニティづくり―芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成を事例に―, 慶應義塾大学日吉紀要社会科学, 21, 63-78.

[16]坂倉杏介ら, 2013, 「共同行為における自己実現の段階モデル」による「地域の居場所」の来場者の行動分析, 地域活性研究, Vo.4, 23-30.

[17]坂倉杏介ら, 2013, 欲求連鎖分析と即興劇を用いた地域の居場所のデザイン手法の研究（口頭発表）, 関東都市学会 2013 年度春季大会.

[18]敷田麻実, 森重昌之, 中村壮一郎, 2012, 中間システムの役割を持つ地域プラットフォームの必要性とその構造分析, 国際広報メディア・観光学ジャーナル, 14, 23-42.

[19]高坂康雅, 2011, 共同体感覚尺度の作成, 教育心理学研究 59(1), 88-99.

[20]田中重好, 2010, 地域から生まれる公共性―公共性と共同性の交点―, ミネルヴァ書房.

[21]津々木晶子ら, 2011, システムズ・アプローチによる住民選好の数量化・見える化：中心市街地の新しい政策創出の方法論, 関東都市学会年報, 13, 110-116.

[22]山浦晴男, 2010, 住民・行政・NPO 協働で進める 最新地域再生マニュアル, 朝日新聞出版.

Abstract

The stepped collaborative self-actualization model (CSA) is a model to analyze the behavior of participants in collaborative community platforms as a gradual process of self-realization through the cooperation action in order to clarify the mechanism of voluntary activity creation. In this study, we constructed an applied CSA model for more various types of platforms and verified it through comparison case study. The result of conducted interviews for participants showed that the applied CSA model explained appropriately the process of behavioral change and awareness of participants, then its effectiveness was revealed.